

コミュニティソーシャルワークの評価方法をめぐって

ー変化の理論と参加型評価を取り入れながらー

日本学術振興会・同志社大学大学院

室田 信一

はじめに

- ・コミュニティソーシャルワークとは
バークレー報告、大橋謙策による提案とそれに対する批判、大阪府での実践、地域包括支援センター、
全国でのモデル事業

コミュニティソーシャルワークの10の機能（大橋謙策，2005）

1. アウトリーチ型のニーズキャッチ
2. エコロジカルな視点を踏まえた相談支援
3. ICFの視点と枠組みを踏まえた自己実現型ケア方針の立案機能
4. エンパワーメントを促し、継続的に支援する
5. インフォーマルケアの開発
6. ソーシャルサポートネットワークづくりとサービスのコーディネート
7. 生活機能障害の受容と自己覚知、ピアカウンセリングの組織化
8. 個別問題の普遍化と予防および制度化
9. ソーシャルアドミニストレーション
10. 地域福祉計画策定

本研究における操作的定義

「コミュニティソーシャルワークとは、個別支援と、個別支援を可能にするための
地域における援助の基盤形成を含むソーシャルワークの実践」

→住民参加を通じた社会変革などの要素は含まれない

- ・プログラムを評価するということ
政策評価、プログラム評価
評価における政治的・経営的な側面→大阪府の現状（別資料参照）
- ・本研究が目指すところ<課題>
新たなプログラム、自由度（現場での裁量）の高いプログラム、ソーシャルワークの専門性の評価で
もある→当事者にとってよいプログラム評価の開発（R&D）

1. 大阪府におけるコミュニティソーシャルワークの概要

平成16年度から5年間の事業として開始

概ね中学校区ごとに拠点を設置しコミュニティソーシャルワーカーを配置

コミュニティソーシャルワーカーの役割

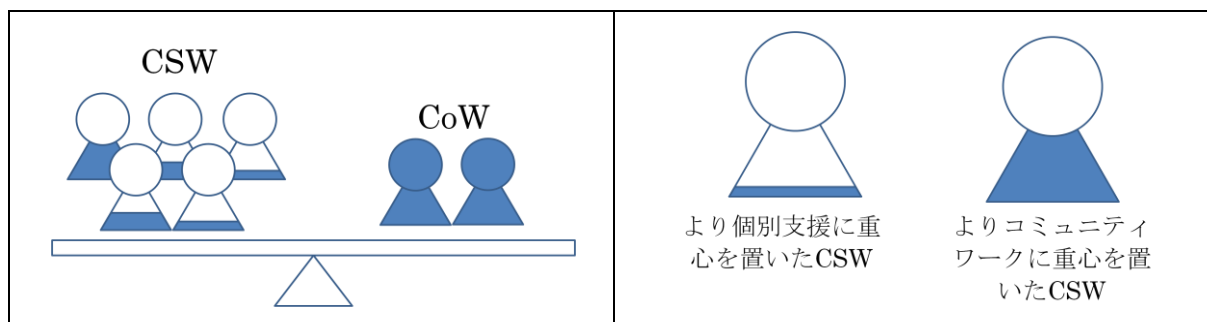
- ・ 制度の狭間のニーズに個別に対応し、チームアプローチを促進させる。

- ・ チームアプローチを通じ、サービスやシステムを提案・開発する。
- ・ 中学校区レベルの「いきいきネット」を充実・深化させる方策を考案し、地域福計画等の諸計画に提案する。

地域のセーフティネット構築と個別支援、開発

- ・ 小学校区におけるセーフティネット会議、ケア会議の開催
- ・ 個別のケースへの対応
- ・ セルフヘルプグループや新規事業の開発

コミュニティソーシャルワーカーにおける2つのバランス



(報告者作成)

2. ソーシャルワークにおけるプログラム評価

評価の種類

目的	方法		分類
資源の分配	計画・効力	⇒	分配型・経済
標準と標的	アカウンタビリティ	⇒	マネジメント・功績
改善・変化	導入	⇒	形成型
説明	知識の生産	⇒	因果・実験型
開発・参加	地域の活力強化	⇒	参加型

Elliot(2005) pp.XXIX の Table 1 を参考に報告者が作成

- ・ 資源の分配の評価 (例：過去5年間、自治体の予算がどのような分野に分配されたか)
- ・ 効果の評価 (例：年間1万個のコンドームを配布したことでHIV感染者が減少したか)
- ・ 変化の評価 (例：外国人コミュニティにおける特別学級の設立が児童の識字率を高めたか)
- ・ 実験型評価 (例：地域における認知症予防プログラムのモニタリング)
- ・ 参加型評価 (例：ボランティアセンターにおけるソーシャル・キャピタルの形成)

評価の視点

- ・ 事前評価 (input) と事後評価 (output)
- ・ プロセスゴールとタスクゴール
- ・ 直線型 (linear) と非直線型 (non-linear)
- ・ 定量分析と定性分析

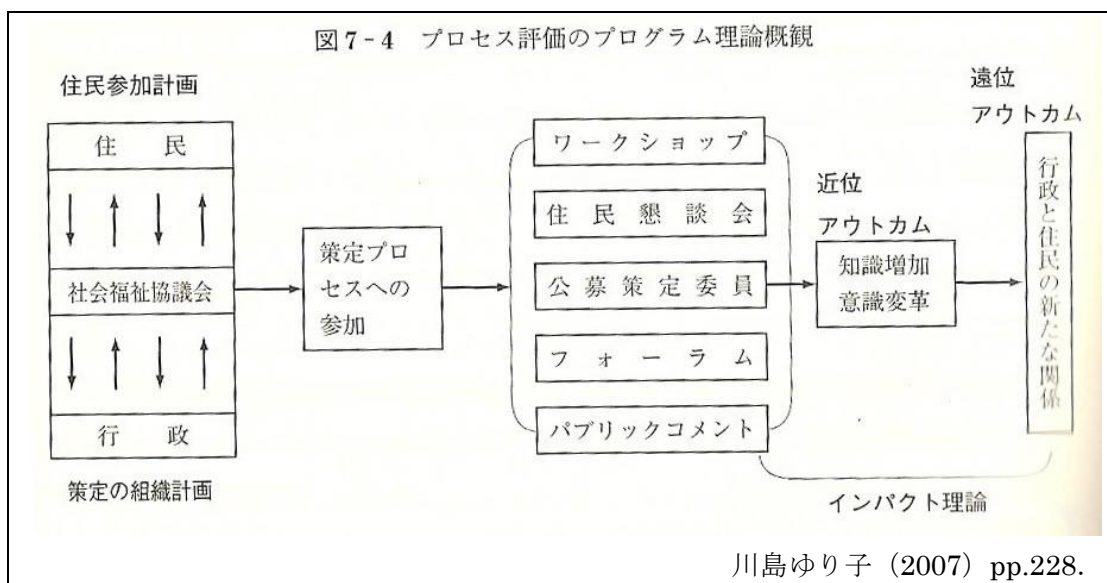
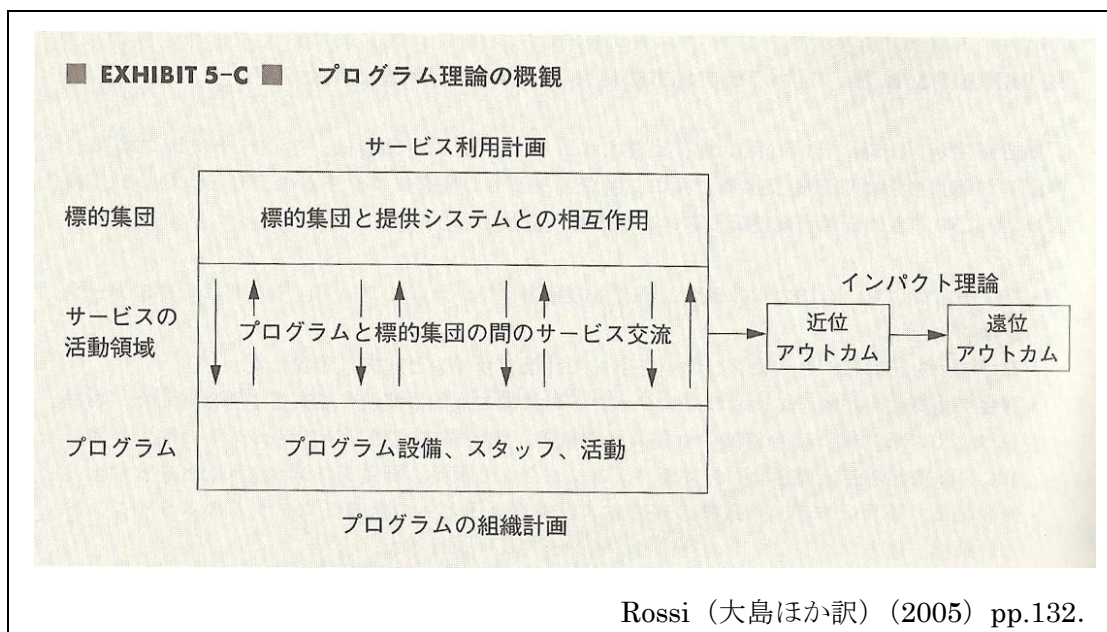
個別ケースの評価におけるシングル・システム・デザイン

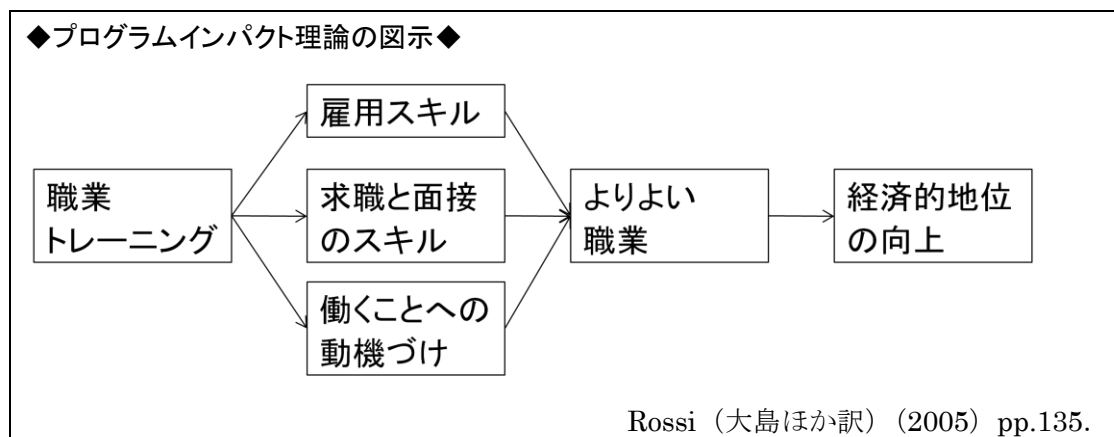
1. 援助を受けている対象の行動に変化が現れたか
 2. その変化は援助によるものか
- コミュニティワーク（間接援助）には向いていない

コミュニティワークのプログラム評価

- 日本においては皆無に等しい
 →社会福祉協議会における発展強化計画

インパクト理論





3. コミュニティソーシャルワークの評価における独自性

前提1) CSWの活動評価において、数値化が容易な部分と困難な部分が存在する。

数値化が容易な部分	直接支援した対象者の数（訪問回数や相談回数など） ケア会議などに参加する関係者の数と会議の回数 アウトリーチの回数（実施回数やチラシの枚数など） など
数値化が困難な部分	地域の関係機関との関係性（協働関係の成熟度） 地域におけるCSWの周知度 地域における住民同士の「つながり」や「きずな」の成熟度 など

前提2) CSWの活動は、地域によって多様である。

CSWの活動内容は以下の条件による影響を受けるとされる。

小地域ネットワークの成熟度、地域のきずなの成熟度、利害関係団体との関係性、フォーマルな福祉資源の充実度、失業率、高齢化率、など。

前提3) CSWの活動目標は地域によって異なるため、評価の在り方も地域によって異なったものを設定する必要がある。

A. CSW自身が目標を設定し、その変化を評価するようなものが考えられる。
 （例：小地域におけるケア会議を毎月実施し、毎回各関係機関の代表者に参加してもらう。担当している3小学校区のうち、1年以内に1つの小学校区でケア会議を立ち上げ、残り2つの小学校区は2年以内にケア会議を立ち上げる。）

B. 地域住民や、民生委員など地域における福祉の担い手、施設職員など様々な視点から評価を行う必要がある。
 自身による評価と関係者による評価を統合する。（NCVO (2003)によるソーシャル・キャピタル指標を参考に。）

C. 直接援助と間接援助の評価を整理する必要がある。
 援助のパターン
 CSW → 対象者
 CSW → 別のワーカーまたは民生委員など (→対象者)
 CSW → 対象者 → 対象者

4. 多様な主体から見る「変化」とその評価

評価の基準

- ・ 個別支援
- ・ セーフティネット構築とチームアプローチ
- ・ プログラム開発

1) 自治体におけるコミュニティソーシャルワーク推進状況 (アセスメント) 【図1】

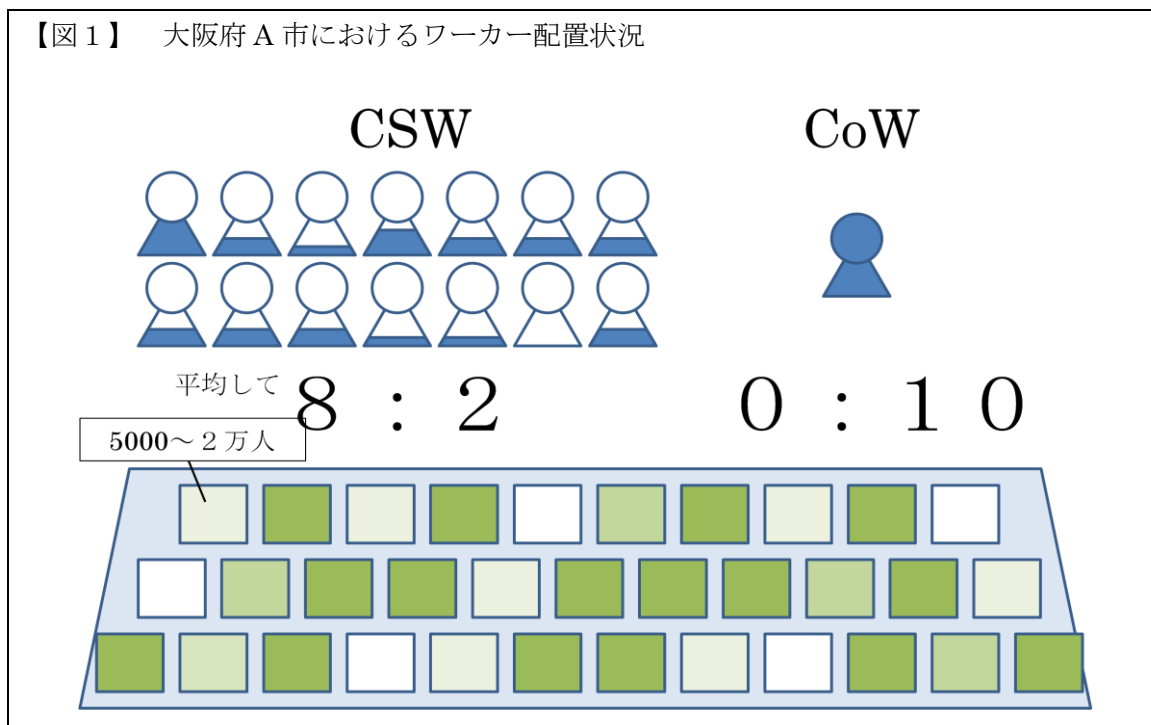
2) 多様な主体から見る「変化」(インパクト評価) 【図2】

コミュニティソーシャルワーカー

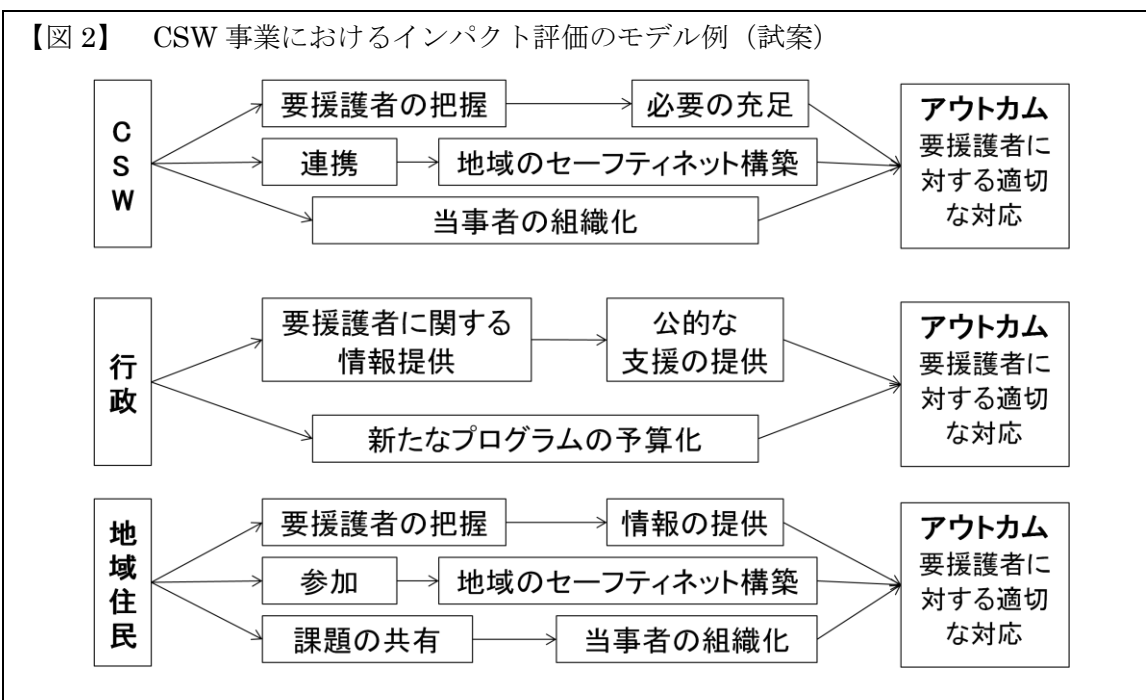
関係機関 (行政含む)

地域住民、民生委員やボランティア、当事者 など

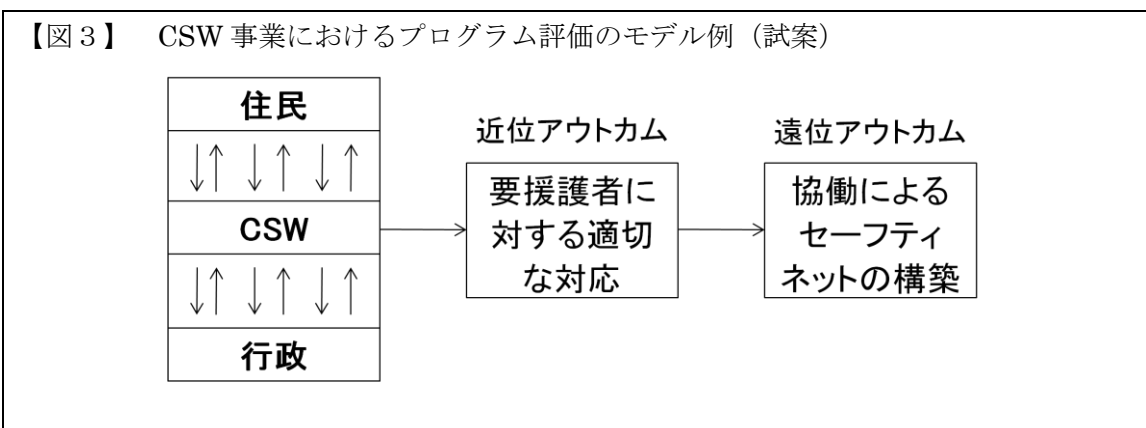
3) 3者間の協働によるセーフティネットの構築 (プログラム評価) 【図3】



(報告者作成)



(報告者作成)



(報告者作成)

5. 残された課題

- ・ スポンサーの判断
- ・ 評価スキルの構築
- ・ 参加型のジレンマ
- ・ 参加の限界（見えない「変化」、言語化できない「変化」）

(参考文献)

- 大橋謙策 (2005) 「わが国におけるソーシャルワークの理論化を求めて」『ソーシャルワーク研究』vol.31, No.1, pp.29-44.
- 大阪府 (2007) 「いきいきネット相談支援センターコミュニティソーシャルワーカー (CSW) 事業ガイドライン」大阪府.
- 大阪府 (2008) 「財政再建プログラム (案)」大阪府.
- 川島ゆり子 (2007) 「地域福祉計画の固有性と評価」牧里毎治ほか編『協働と参加の地域福祉計画—福祉コミュニティの形成に向けて』ミネルヴァ書房, pp.203-237.
- 和気康太 (2005) 「地域福祉計画における評価」武川正吾編『地域福祉計画—ガバナンス時代の社会福祉計画』有斐閣, pp.189-209.
- 和気康太 (2006) 「地域福祉実践研究の方法的課題—地域福祉計画の研究・開発と評価を中心に—」日本地域福祉学会編『日本の地域福祉』第20巻, pp.15-30.
- Milligan, Sharon et al. (2005). Implementing a Theory of Change Evaluation in the Cleveland Community-Building Initiative: A Case Study. In Elliot Stern (Ed.), *Evaluation Research Methods: Volume III* (pp. 78-114). London: Sage Publications.
- NCVO (2003). Social Capital in Action: adding up local connections and networks.
- Rossi, P. H et al. (2004) *Evaluation: A Systematic Approach 7th Edition*, Sage Publication (大島巖ほか監訳『プログラム評価の理論と方法—システムティックな対人サービス・政策評価の実践ガイド』日本評論社, 2005年)
- Rothman, Jack. (1980) *Social R&D: Research and Development in the Human Services*, Prentice-Hall, INC.
- Stern, Elliot. (2005). Editor's Introduction. In Elliot Stern (Ed.), *Evaluation Research Methods: Volume I* (pp. XXI-XLIII). London: Sage Publications.